

# 事故予防・再考

【連載第3回】

保育の安全研究・教育センター 代表 掛札逸美 先生

## ●ヒヤリハットというところ…ケガ？

保育園で「ヒヤリハット」というと、たいていはケガ。かみつきやひつかきもケガ（外傷）の一種で、こちらもヒヤリハットがたくさん出ます。

ケガもケガのヒヤリハットも多発します。そして、ケガは見ている側にも「痛そう！」「大丈夫？」という感覚を引き起こします。保護者に説明する必要性を伴うことも少なくありません。結果、保育者の意識にのほりやすいのです。

でも、ケガの大部分は子どもの命を奪いません。確かに、ケガやケガになりそうだったできごとには「保育の質」を上げるうえでとても大切な情報があります。

（次回）



でも、保育中のケガは子どもの命を奪わないのです。一方で、こちらに意識をとられていないと、命を奪いかねない日々の「気づき」を無視してしまいかねません。

## ●命を守る小さな「気づき」の大切さ

ヒヤリハットではありませぬ。それよりもっと小さな気づき、「これ、壊れてる」「こんなものが落ちてる」「なぜ、ここにこれが置いてあるの？」といったものです。

ヒヤリとすらしらない、小さな気づき。ここに命を奪う危なさが隠れています。たとえば、

・落ちていたもの、破損など

園内にはありとあらゆるものが落ちており、誤飲や誤嚥などの危険があります。遊具や家具などの破損は、ケガだけでなく、落下や、服やカバンなどのひっかけの危なさにもなります。なにより、「あれ？」「いつもと違う？」という小さな気づきをそのままにしない習慣づけの練習になります。

### ・睡眠環境

「○○ちゃんのベビーベッドにぬいぐるみが入ってた！」「ヒモ通しのヒモを持って寝てたよ」など。うつぶせ寝以外の口や首まわりの危険にも「気づこう！」という呼びかけになります。

### ・食品の納品ミス、取り違えなど

特に、調理室から出てくるまでの気づきは大切です。調理前・中の混入に気づけなければ、その後のチェックには意味がないからです。「今日のミックス粉、いつもとブランドが違ってた。中身は同じだったけど…」「スープを



アレルギー食用に取り分ける時、鍋を間違えそうになった！」

### ・食べている時の様子

「○○ちゃん、モヤシがまだ噛み切れないね。ちよっとケボツてなつた」「△△ちゃん、最近、どんどん飲み込んでるやうね！」「鶏肉のスジはしっかりと切らないと、つながって飲み込んで危ないよ」など、一人ひとりの咀嚼・嚥下、食べ方の特徴などのほか、調理の方法に関わる気づきもあるでしょう。

## ●「気づいてくれてありがとう」「言ってくれて、ありがとう」が増える気づき

前項はあくまでも例ですが（※）、ここで大切なのは「気づいて適切に処理した（拾った、捨てた、直したなど）のだから、これで終わり」ではなく、「気づいたのだから、みんなにも伝えて別の気づきをうながそう」という行動です。

あなたは気づいても、他の職員は気づかないかもしれない。あなたは今回気づけても、次は気づかないかもしれない。だから、あなたの気づきをそのままにしておくはいけません。

なにより、こうした気づきはすべて、「誰がいけない？」という責任追及にはつながらず、「気づいてくれてありがとう」「伝えてくれてありがとう」につながるものです（もちろん、どんな気づきでも責任追及や謝罪につなげ

掛札逸美先生プロフィール  
1964年生まれ。心理学博士（健康心理学）。NPO 法人保育の安全研究・教育センター代表。



てしまう園文化はあります。でも、怒られる恐怖が蔓延している園では情報が流れず、子どもの命は守れません。そして、気づいた人が対応を考える必要すらありません。対応は、すべて違うのですから。たとえば、

・保護者が落ちた、または子どものポケットから出てきたと明らかなのは、保護者にも伝える。

・壊れている遊具、道具、家具などは園で修繕する。

・睡眠環境の危険などは、「見てね！」と声をかけあうきっかけにする。

・納品ミスなどは業者に伝える。調理提供の中で取り違えなどが起きにくい手順や位置を皆で考える（誰もが同じように間違える可能性があるから）。

・子どもの咀嚼・嚥下、食べ方については、食事介助につく他の職員に伝える。保護者にも伝える。

気づき全体を把握して、こうした「仕分け」をするのが施設長や主任、看護師の仕事です。職員は、気づいたらすぐ付箋などに書いて、所定の場所や決められたノートに貼っておくだけ。さあ、実践してみませんか？

（※詳しくは、NPO 法人保育の安全研究・教育センターのウェブサイトを、「安全に関するトピックス」→「1-1 日常の「気づき」を深刻な結果の予防に活かす」）